

## ●●事例2●●

# KYT 活動は工夫ひとつで変化する 実際の作業現場で実施する「3現KYT」



関西ペイント(株) 平塚事業所  
事務部 安全環境グループ 課長

**佐藤 裕稔** Sato Hirotochi

## Profile

1989年に入社。合成樹脂製造を経て、2011年より現部署にて安全・衛生・環境を担当。  
安全管理者・衛生工学衛生管理者。

## 当社の概要

当社は1918年の創業以来、各種塗料の分野で日本の塗料メーカーでは最も先進的なメーカーとして成長し、今日では世界の代表的なペイントメーカーの地位を確立するに至っている。当社グループ製品群は、「保護」「美粧」「特別な機能の付与」「環境への対応」という塗料の重要な役割を果たすことで、幅広い分野で高い評価と信頼を得ている。

さて、本事例を紹介する平塚事業所は、従業員180人で、1960年に竣工し、生産を開始した。当初は缶用塗料のみを生産していたが、今では自動車用塗料を中心に工業用塗料、建築用塗料、防食用塗料を生産している。また、塗料の原材料になるアクリル樹脂やアルキド樹脂等の合成樹脂も製造しており、これらの製品、仕掛品、半製品は、関西ペイント国内4工場の中で最も多い生産数量を誇る。

## 当社の労働安全衛生活動

当社では災害ゼロを目指して、安全衛生活動に取り組んでいる。その主な活動内容は、グループ全体で全員参加の安全総点検を7月に実施、9～10月にはトップによる19事業所を対象とした中央環境安全衛生診断を実施している（そのほか、全国に33カ所あるカ

ラーセンターは毎年、海外事業所は1～3年に1回の頻度で診断を実施）。また、非常作業を含めた日々の危険予知訓練、毎月のゼロ発表会による情報横展開、危険体験教室への全員参加、KYT訓練への全員参加など、安全作業の徹底に向けた活動を進めている。

## KYT活動の工夫と進化

災害発生の原因で問題になるのは「つい、うっかり」「まさか、そんなことが」である。これらへの対応はハード対策だけでは限界があり、ソフト対策、それもヒューマンウェアの対策を実施しなければ災害を防ぐことはできない。つまり、「危険を危険と感じ取る感性」「危険を予知する能力」が求められる。この能力を高めることこそ、ゼロ達成の鍵である。

さて、危険予知といえばKYT（危険予知訓練）だが、当社がこれまで取り組んできたKYTはどうだったのだろうかという疑問が、安全衛生担当者間で話題に挙がった。そこで、従業員に本音を聞いたところ、「サークルでは自作イラストを作成し、毎日実施していたが、回数のノルマ達成のためにやっていた」「マンネリ化して茶番劇だ」と、これまでのKYTを批判する声も上がった。これでは感性を高めることなど無理であることから、KYT活動の工夫が求められた。そこで、

以下の活動を実施することにした。

### 〈演練巡回指導の実施〉

災害の未然防止を目的として、毎月1回、事業所長以下の部課長全員による巡回指導を実施した。指導のポイントは、「演練の進め方は正しくスムーズに実施されているか」「危険要因と現象を5項目以上、速く・的確に表現できたか」「不意の状況を想定しているか」「対策は本当に継続的に実施できるか」「巡回者の質問やアドバイスに対して的確に答えられたか」を確認することである。

### 〈イラストから写真へ〉

従業員にはイラストシートを作成して提出するように求めていたが、なかなか枚数が出なかった。そこで、イラスト部分を写真でも可とした。その結果、KYTシートの提出枚数が増えた。また、写真だと普段の作業風景のままの状況なので、シートを使ったKYTよりも違和感なく実施できるようになった。

ほかには、健康確認のほかに服装チェックも入れる、演練が終わったあとに「一言問いかけ」を行う、シートを使わないでKYを実施する、立ったままではなく動き回りながらKYを行う、などが行われるようになった。

## 「3現KYT」を導入した経緯

前述のような、イラストや写真によるKYTは、中災防の指導を基に長年実施してきており、KYT基礎4ラウンド法やワンポイントKYTは危険予知訓練の基本であり、重要な手法となっている。しかし、イラストや写真によるKYTでは、表面的な危険予知が主体となりやすく、実際の作業に生かされないのではという懸念があった。そこで、それまで当事業所の一部で実施していた、イラストや写真を使わずに作業現場で行うKYTを2006年度の中央環境安全衛生診で披露したところ、当時の中央環境安全管理者に感銘を与えられた。

そこで、この「現地・現物・現状」で行うKYTを「3現KYT」と命名した。そして、

2007年度から全事業所を対象に実施することになった。

## 3現KYTの特長

3現KYTの1つ目の特長は、実際の作業時と同じように動作して、実施することである。実際に動くことで、イラストや写真では気付かなかった危険が見えてくる。2つ目の特長は、他のメンバーが動作しているのを見ることで、今まで気付かなかった危険を見付けることができる点である。イラストや写真によるKYTでは他のメンバーが話しているときには危険の要因を共有していないことがよくあるが、3現KYTでは実際の動きや動作があることから、現物の行動と認識し、危険の要因を共有しやすくなる。3つ目の特長は、対策も動作で示すことで、実現・実行可能かどうかはすぐに分かる点である。実際にKYを行う場所を目にしているの、誰が実施しても同じ行動に結びつけることが容易になる。

そのほか、服装確認や、リーダーによる状況説明を行うことで、一緒に実施する人たちに一体感が生まれるという効果もある(図)。

## 導入の効果

3現KYTを導入したことによる効果には、以下のものがあつた。

- ①イラストが不要なため、突発作業にも対応できるようになった。
- ②イラストよりも分かりやすく、イラストの準備が不要ということから、海外にある子会社のKYT教育にも活用できる。
- ③ベテランが新人の実際の作業を観察できることから、ベテランと新人とのコミュニケーション手段になる。さらに、ベテランは新人の不安定な作業を指摘でき、安全かつ効率よい動作を指導できる。
- ④事務部門でもイラストではなく実際のオフィスで実施するため、具体的な危険と具体的な対策が出てくる。

⑤安全面の行動だけでなく、作業効率に係る改善提案にもつなげやすい。

### 3現KYTの これからの課題

今では当事業所に定着し、効果が現れている3現KYTだが、まだいくつかの課題も残っている。その課題を次に示す。

#### (1) 現物を動かすことによる危険

##### 1 ラウンドの危険要因

因の抽出で、危険な作業を実演しようとしてしまうことがある。この対策としては、KYTでけがをしないように注意喚起する、危ない作業は「真似」で行う、重量物（例：ドラム缶）は空のドラム缶を使用する、危険な薬剤は水を代用する、危険を伴う設備の操作（例：ホイストクレーンによるフレコンバッグ吊り上げ）は最初に手本として正しい作業を実演したあとに口頭で説明する、などがある。

#### (2) KYT基礎4ラウンド法との乖離

物を動かすことに注力するあまり、危険な状態と危険な行動を表現できないことがある。また、「なぜ、そのような行動をしてしまうのか」が、明確に表現できていない。加えて、選んだ対策が危険のポイントへの対策になっているのか、確認できないことがある。これらの対策としては、各事業所のキーマンを防災のプログラム研究会に参加させ、KYT基礎4ラウンド法の基本を再確認させ、各事業所メンバー全員に教育するようにした。

### さらなる安全事業所確立のために

ここ数年、設備に起因する事故が多くなっ

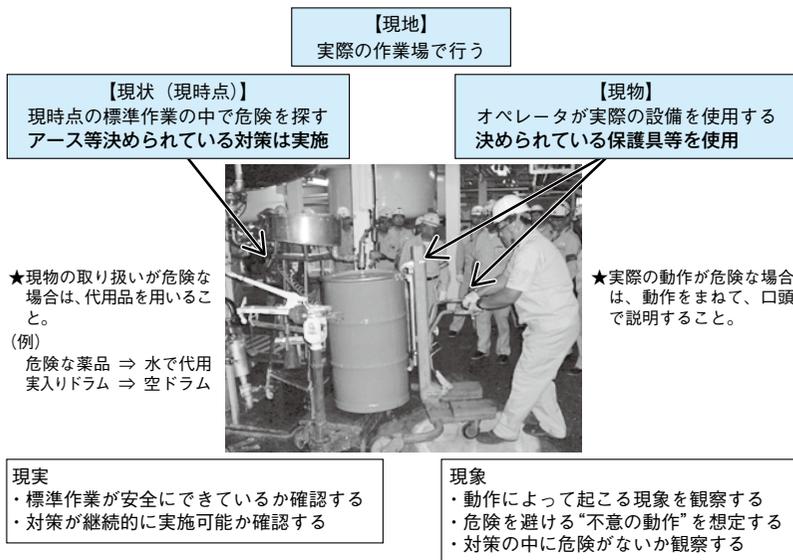


図 3現KYTの進め方

てきている状況に危機感を持ち、趣向を変えたKYTの導入も始めた。新規設備導入前に、機器の図面や作業フロー図をもとに、安全・品質に関わる潜在危険の発見や、オペレーターの動線確保、また工務担当者の設備に関するスキル向上を目的として始めたのが、“エンジニアリングKYT”と称した活動である。これは、実際の設置担当者だけでなく、工務グループ全員で有効な設備対策を考えるので、危険や改善事項が抽出しやすくなる。その後、改善事項を設備に展開した上で設備導入へつなげていける。今後も、安心・安全・効率的な設備導入を心がけ、本KYT活動を継続したいと考えている。

今回紹介した活動が実を結んで、休業災害や災害総件数は減ったが、不休災害はここ数年減っていない現状があり、効果を数字で表すことの難しさを感じている。そのため、引き続き、一人ひとりの安全意識、危険への感受性の向上などさらに安全活動を活性化させて、災害防止に努めていきたい。また、事業所の全従業員が生産、品質管理、出荷、設備維持に日々鋭意取り組んでおり、今後もお客さまに満足していただける製品を供給すべく努力していきたい。